

梅子ばあちゃん

私と梅子ばあちゃん（仮名）との出会いは、先生になって初めての夏のことでした。梅子ばあちゃんは、地域の児童館でいつも子どもたちや私たち教師に優しく声をかけてくれる館長さんです。



先生になって四か月、その頃の私は、授業もうまくできず、学級の子どもたちはケンカが絶えず、あせってばかりでした。そんな時に、梅子ばあちゃんが、児童館で私に声をかけてくれたのです。

「先生、少しは、慣れたかね。ちよっと、きついっちゃないね。笑顔よ、笑顔が一番。」

子どもの、よかとこ見よるね。

どん子も、よかとこ いっぱいあるとよ。

先生にもよかとこいっぱいあるよ、

元気いっぱい、よう動きよる。

あせつたらいかん。ゆっくり先生になればよかと。よかとこ見つけて、ニコニコしんしゃい。」

テストの点数も大事。

でもね。私は、子どもたちみんなに、自分の気持ちを伝える力をつけてほしいと。」

「おかしいことは、おかしい。くやしいことは、くやしいという力。

手を出したり、足を出したりせんで、言葉や文章で伝える力をつけてほしいとよ。」

梅子ばあちゃんは、優しい言い方でしたが、目には涙を浮かべ、唇は震えていました。

私は、それまで、テストで点数をとれることが学力だと思い、点数がとれる子をよい子とっていました。

梅子ばあちゃんの「点数だけではなく、自分の思いや考えを伝える力をつけてほしい。」という言葉は、子どもや人の見方について見直すきっかけになりました。

すべての子どもたちに

梅子ばあちゃんは、子どもの頃からとても苦勞された方でした。弟や妹の面倒を見ながら、母親の仕事を手伝っていたので、学校にはほとんど行くことができませんでした。たまに学校に行っても、被差別地区の出身というだけで差別され、勉強などでき

私は、その言葉にハッとしました。梅子ばあちゃんが言われるように、子どものいいところを見つめようとしていなかったことに気づいたのです。

子どものいいところを見つめるより、自分が思うような授業をしたい、自分の言うことを聞く子どもたちであってほしいと考えていたのです。

つけてほしい力

二期になり、梅子ばあちゃんの一言から、子どもたちのいいところを見つめるように努力しました。そうすると、笑顔が増え、学級もまとまってきました。

しかし、授業は相変わらずうまくいかずに、学力をつけるにはどうしたらいいのかわかりませんでした。それに、授業がうまくいかないのは、親がきちんとしつけることをしていないから、家庭学習の習慣がついていないからなど、家庭に責任があると考えていました。

その年の冬、梅子ばあちゃんとなかなか勉強についていけない子どもの話をしている時でした。

「先生は、学力、学力言っね。」

先生が言いよるとは、どんな学力ね？

テストの点数だけで子どもをみよらんね。

なかったのです。おとなになつてからは、日雇いの肉体労働で家庭を支え、たくましく生きてこられました。その中で、差別のおかしさに気づき、仲間とともに部落解放運動を立ち上げ、差別のおかしさを伝えてこられました。そして、自分らしく生きるために、識字学級で差別によって奪われた文字を取り戻してきたのです。

教育の大切さをだれよりもわかっているからこそ、「伝える力を」と言われたのです。それも、被差別地区の子だけでなく、教室にいるすべての子ども「みんなに」つけてほしいと言われたのです。

梅子ばあちゃんは、誰に対しても自分の生い立ちや差別された体験を、言葉を選びながら、優しく丁寧に話されます。それは、差別をなくすために一緒に活動し、だれもが胸をはって堂々と生きていける社会をつくりましようというメッセージです。

私も、決めつけや偏った見方をしている自分に気づき、それが差別につながっていることを知りました。

この出会いを忘れずに、自分自身を見つめ、差別をなくすために身近で小さなことから積み上げていきたいと思えます。